

---

## 特 集

---

健康・疾病・死亡と寿命に関する調査研究

### 特集にあたって

高 橋 重 郷

この特集に掲載された論文は、平成8年から10年に実施された研究プロジェクト『健康・疾病・死亡ならびに余命に関する研究』の中で得られた研究成果の一部を掲載したものである。

人口研究分野における死亡研究は、従来から主要な研究領域の一部を占めてきた。しかしながら、死亡研究は、近年の出生力研究に比較して関心の度合いが低く、日本の人口研究においても活発な研究分野とはいいがたい状況にある。その理由としては、第一に、死亡の原因がかつての感染症から悪性新生物（がん）や心臓疾患などの生活習慣病に変化したこと。第二に、その結果、死亡率変動の要因研究に医学領域の専門性が必要になり、社会統計学的研究手法に基礎を置く人口学研究領域では比較的扱うことが困難な要素を多分に含むようになってきたためであると考えられる。

しかしながら、一方では人口学の領域における死亡研究は、人口動態統計に基づく生命表の研究、年齢別死亡率の数理モデル研究や生存確率の将来予測研究に多くの関心が向けられてきた。このような寿命や生命表の将来予測の研究は、着実に進歩がみられ、将来人口予測に応用発展されてきている。

1990年代後半になって、死亡研究は新たな研究関心を呼ぶようになった。すなわち、健康・疾病・死亡と余命に関する研究である。従来の死亡研究では、健康や疾病との関連で死亡研究がなされることはあまりなかった。人口高齢化が大きく進展してきた1990年代に入ると、医療保険、介護保険、および社会保険の財政問題が大きな社会的関心を呼び、死亡前の段階における健康の質の改善が大きな社会的な課題となった。従来の平均寿命の概念によって人間の生存期間をとらえるよりも、健康的に生存している期間を観察することにより、人口レベルの健康度を把握する研究が進んだ。このような観点からの健康の質に関する研究は、2001年に始まった我が国の健康政策である「健康日本21」の中心的課題となり、人口研究における死亡研究も新たな段階を迎えるようになった。

この特集号では、三つの研究論文が掲載してある。最初の論文は、米国ロックフェラー大学人口ラボラトリーの堀内四郎先生の「死亡パターンの歴史的変遷」と題する論文である。この論文は、人口学における死亡研究の論文サーベイという特徴があり、豊富に蓄積された先行研究から死亡パターンの歴史的転換説が展開されている。このような研究が我

が国の人口研究ではこれまで紹介されたことがなく、人口研究分野の研究者にとって詳細な文献リストともに貴重な研究となっている。残りの二編の論文は、齋藤安彦氏の「健康状態別余命の年次推移：1992年・1995年・1998年」および、山口扶弥氏と梯 正之氏の共著論文「高齢者の平均自立期間および要介護期間に関連する諸要因の分析」である。両論文とも「健康寿命」に関する研究で、今後の人口研究における死亡研究の新たな方向を示す研究である。